

<事例>

A君は小学校6年生。性格は明るく元気よく、授業中積極的に発言する活発な児童で、クラスを引っ張るリーダーとしてみんなが認めている存在であった。しかし、A君には物事を強引に決めつけるところがあり、自分に対する批判には耳を貸さないことがよくあった。そんなことで、周りの子どもたちは口には出さないが、(A君には逆らわない方が良く)と恐れを抱き、表立って反発するようなことはなかった。

二学期は運動会の準備とともに始まり、A君は応援リーダーに選ばれた。それから一週間がたった頃、A君の様子がおかしいことにB先生が気づいた。誰も遊ばず、教室でうつむいて座ったままだったからだ。放課後A君を呼んで事情を聞いた。すると、「みんなから無視されている。誰も口をきいてくれない」という内容を打ち明けた。A君の陰で「Aって、なんか、威張ってるよね。自分勝手だし…。自分を何様だと思ってるんだろう」と言い、「みんなで口をきかないで無視しよう」という暗黙のルールを作り、みんなから無視されているということだった。誰が中心になっているかは分からない。

B先生はその状況や事実を把握できていなかった。A君から聞いて初めてわかった。

先生が教室にいない休憩時間や放課後になると、執拗にA君を無視していた。周囲の子たちは、A君に前々から嫌悪感をもっていたため、「無視がいけない」という罪悪感はなかった。

とりあえずB先生は、その日はA君に「先生も力になるから大丈夫だよ」と伝えて帰宅させた。

そうした状況はその日のうちにA君の両親の耳に入った。帰宅後、「学校に行きたくない」と言い出したため、その理由を両親がA君に問いただしたのだ。

その翌日、A君は欠席した。そしてA君の母親が学校を訪れ、担任に面会を求めた。「うちの子が友達から無視されているようです。先生はこの事実をどこまで把握しておられますか」と担任に厳しい口調で詰め寄った。